

# 少女生の母

永代美知代

「母様だ！」

彌生はハツとして駆け出すと、何處を如何飛んで来たのか、二三丁も離れた横丁の、とある家の板塀によりかゝつて、ホツと四周を見廻した。

「まあ、あんなにお若くて！ 母様には私つきりお兒が無いの可知し？」

まだく騒立つ胸を静めも敢へず、彌生はこんな事も思つて見た。

水色のてがらをかけた大形の丸鬘に、お品の好い熊茶のお被布を召した、でつぶりとお色の白い、三

しても、彌生は家庭で本當の母様の事を思つてゐるような容子も見せ兼ねる、思ひ餘つた末に、此方ばかりはと思はれる鎌倉の伯母様に、そつと何彼を訊かうとすると、何時も剣もほろゝの御挨拶なのである。

「彌生さん、あなたは何故、あんな方の事を思つたりするんです、あなたの生の母様ですけれど、云はばまあ悪婦と云つても可いやうな女なのです、華族の姫様、かりにも梅津家の息女と生れて、そしてあなたの父様ともあらうかたの妻でありながら、悲しい破鏡の歎を見なければならなくなつた、それには何か云ふに云はれぬ深い事情がなくてはなりません、い、ね、あんな方の事を二度と重ねて思つたりしてはなりませんよ。」

果ては斯うした事までお云ひ渡しになつた。

「深い事情——悪婦——」

彌生は考へると身の毛立つた。

「そんな、そんな事があるもんぢやない、私の母様が悪婦だなんて、そんな譯がない！」

十二三位とより見えない奥様風の、あれは確かに母様に相違ない。幼い頃、まだやつと五つか六つのその頃にお別れしたきり、唯の一度もお出會ひ申した事はなし、お寫眞だつて皆な意地悪の伯母様にかくされて、お顔に見覚えと云つては些しもない、でも何故だか、どうしても母様に相違ないと思はれる、それに水谷と表札打た御門の前にお立ちなすつた。水谷と云ふのは母様が御再縁なすつた先の、今のお家の姓だもの。

あゝ水谷！

彌生はどんなにこの姓一つを知らうとして、探し當やうとして苦勞したことか、小さい胸を痛めて、殆んど何年越し思ひ惱んだか。

「彌生ちゃんには何を食べさせませう？ あの娘はどんなものがお好きでせうか。」

斯うした事をわざ／＼鎌倉へお嫁きなすつた伯母様の許までお訊きに被行やる現在の繼母様は、さうまでおやさしい。そのおやさしい繼母様の慈愛に對

幾晩と無く悶え明かした結果、彌生は、ふと思ひ浮んだ。

「さうだ、中野のお祖母様をお訪ねして見ませう！」

それは幼い頃の思ひ出であつた。その頃出来たばかりの、お茶の水中野間の電車に乗つて、窓にすがつた彌生がお堀に浮んだ水鳥に見惚れて居ると、母様はよくその顔を覗いて頬摺りなすつた。

「彌生ちゃんも母様も、中野のお祖母様が一等大好きね。」

お祖母様のお顔にも覚えがない。だが、母様とお二人泣きながらのお話に、俯向けなすつたほんのくぼが震えて、お顔は確か切り下げで被在つたやうに思はれる。

「彌生ちゃん、何時までも／＼お日様がお落ちにならないで、中野に遊んでられると可いのね。」

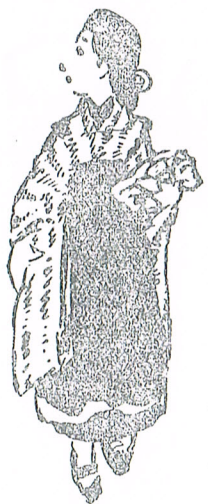
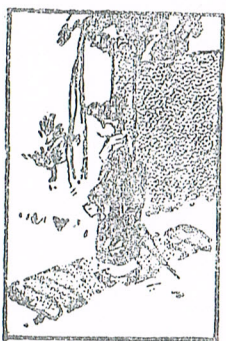
歸りには定つて斯う仰有つた。そして淋しい中野の停車場に立つて、萬世橋行の電車を待ち合はせる

間 母様のお袖にしつかりつかまつたお下髪の少女  
を、彌生は人事のやうにもはつきり思ひ出す。  
その淋しい中野の停車場から、木枯さむい田舎道  
を、うろ覚えもない梅津家へと辿つて、  
彌生は辛と見覚えのある門をくぐつ  
た。

『いや、お尋ねの御隠居様は昨年已に  
御逝去で、はい、清子様もとつくに御  
再縁遊はしまして、只今では四谷左門  
町にお住ひ遊ばしま

す、はい、水谷様と  
仰有いますが、貴女  
様は？失禮ながらど  
なた様で被在いま  
せう？』

確か塚田とか云つた老人が、昔ながらの癖の、眼  
鏡越しにじつと此方を見入つて云つた。  
『では又、皆様へおよろしく。』



云ひ捨て、逃げるやうに出て来た彌生は、我なが  
らその大膽な行爲に呆れてしまった。  
『でも、まあよかつた事！是非母様をお訪ねしま

せう。』  
學校の歸途を四谷  
に廻つて、彌生は雨  
の降る日でも、  
傘をかしげて左門  
町の通をあるき廻つ

た。  
一體に、軍人の住居らしいの、多い土地柄で、ち  
よつとした冠木門に水谷と表札されたのに彌生が耳  
當ると、折柄、騎馬の將校かそこを入つた。  
『アッ！』彌生は顔を赫めて俯向いたまゝ、足早  
行き過ぎた。

『今日こそあの門をくぐつて見よう！』  
新宿行の電車を乗り捨てる時には、何時でも斯う  
決心する、だが左門町にさしかゝる頃から胸が騒い

で、彌生は幾度となく冠木門を行つたり來たりする  
のである。

『母様が出て居てくださると可い、そうしたら突然  
お袖にすがつて、思ふさま泣いてく、どんなに嬉  
しいか、母様だつて、たまには何處かお出ましにな  
ることもあらうのに、斯うして私を毎日々々出掛け  
ても、母様はちつとも私の事なんぞ思ひ出して下  
さらないのだらうか、母様が御門の外に出て下され  
ば可い。』

彌生はこんな風にも思つて見た。その願ひが叶つ  
て、今日彌生が來かゝると、水色の手柄をかけた丸  
髻の母様らしいお姿が御門の傍に立つて居る。

と、もう彌生の眼先は暗んでしまった。横町の何  
處かの板扉に寄りかゝつて、ぼんやり立ちすくんだ  
彌生は、また思ひ返したやうに、いそぎ足に水谷の  
門前に戻つて來た。